

京都部落問題 研究資料センター通信

第18号

発行日 2010年1月25日 (年4回発行) 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

報告 二〇〇九年度部落史連続講座

第1回

武内了温の部落問題論

真宗大谷派における融和運動の軌跡

講師 本郷浩二さん

(世界人権問題研究センター)

二〇〇九年度部落史連続講座パート2の第一回目が一月六日、京都府部落解放センターで開催され、秋定所長の挨拶で始まった。世界人権問題研究センターの本郷浩二氏が「武内了温の部落問題論 真宗大谷派における融和運動の軌跡」と題して講演された。市民、教員など二〇名が参加した。講演要旨は以下の通り。

武内は一八九一年に兵庫県の大谷派寺院の住職の子として出生。幼時に父を亡くしたが、大谷派法主の経済的援助により、京都帝大を卒業。一九二〇年に大谷派宗務所に入った。時代は米騒動後の社会政策や部落改善事業に多大な影響を与えている時であった。米騒動のもたらした衝撃は、従来の救護課から社会課、社会局設置へと動いていた中央官庁と、それに従う地方官庁における社会課設置の

動きを加速させていた。

このような社会の動きを見て、真宗大谷派でも単なる慈善事業ではなく、教団の社会的存在意義を問うものとして社会事業を進めるために、一九二一年に社会課を設置し、武内は主事になった。具体的な活動は、社会事業講習所を設置し、若い僧侶の育成に努めた。

しかし、同派内の部落問題に対する無理解に困まれ、一九二六年に融和団体真身を創立し、その他ハンセン病の問題について光明会を興し、回復患者の救護運動に携わるなど、晩年に至るまで大谷派内の融和運動の第一線で活動した。

武内の部落問題に取り組む姿勢は、部落問題が自分にとってどのような意味があるのかを自問し、自己が差別する側に立つことを認識することから出発した。自らの差別性を克服しようとするところに初めて、被差別大衆との連帯の可能性があるとしていた。また、「自他平等の境地」を目指し、運動を展開した。

大谷派内では彼自身が「全く私

ひとりの独走であった」と述懐しているように中々理解が得られなかったが、その遺志は数人の有志に受け継がれ、今日と同派内の原動力になっている。

一方、彼は水平運動に対して終始共鳴し、敗戦後の一九四六年、全国部落代表者会議発起人会にも参加した。

従来の研究は、融和運動への評価が低く、武内の知名度もまた低かったが、彼の部落問題論の今日的な意義と限界を融和運動の再評価とともに、とらえ直す必要があるだろう。

(運営委員 湯浅孝子)

第2回

「部落＝窮乏説」と

一面的な部落観

部落問題学習の課題について考える

講師 石元清英さん

(関西大学)

部落史連続講座パート2の第二回目が石元清英さんによって十一月二十日、京都府部落解放センターで行われた。石元さんは、関西大学で部落問題の授業をされているが、タイトル「部落＝窮乏説」と一面的な部落観 部落問題学習の課題について考える」が示すように、学生たちから多くのアン

ケートを取りながら、より豊かで効率的な授業を行おうと模索されながら、たどりついた内容を発表された。

学生たちのほとんどは、具体的な部落との係わりや知識をほとんどもたないまま、中学・高校時代に年一、二度、一方的な「差別はいけない」という、おしつけ的な同和教育をうけてきただけの者が多く、部落に対しては「暗い・こわい・貧しい」というイメージを持ちながら、部落問題から遠ざかろうとする傾向が濃厚である。

この状況の中で、確かに現在でも差別は残り、経済的にも低位な状況に置かれていることは事実であるが、授業をそこから入ると、先に述べた学生たちの部落へのイメージをより高めていくことにもなりかねない。

そこで石元氏は、高度経済成長と部落の実態変化について、たとえば新たに作られていった改良住宅の様子やそこの生活内容、あるいは就職実態や部落外との結婚比率増加、部落外への流出増加、安定層の流出問題など、現在の部落の実相を具体的に提示して学生たちの暗いイメージを払拭していきながら、部落問題を自らの問題

として考えていく授業を心がけていると、話された。

また、最後に問題提起として、部落問題こそ人権問題の中核だという視点からだけでなく、在日朝鮮人・韓国人問題やニューカマー問題など広い人権問題の一部だという視点も今後持つべきではないか、とも話された。確かに、人権教育の名の下に同和教育が抹消されていきつつある現在、考えていくべき課題であろう。

(運営委員 金森襄作)

第3回

河原町天主堂と

京都・私立女子和洋技芸学校

仏人ブロス・メリーが遺したものと

講師 白石 正明さん

(元佐賀大学)

部落史連続講座パート2の第三回目が二月一日に京都府部落解放センターで開催され、二〇名を越える参加がありました。白石正明さんが「河原町天主堂と京都・私立女子和洋技芸学校 仏人ブロス・メリーが遺したものと題して左記の内容の講演を行いました。

* * *

京都におけるイエズス会の教会

は、近代に入って一八八六年(明治一九)の「幼きイエズス修道会」の入洛以降、転々と所在地を移したが、一八八九年(明治二二)聖フランシスコ・ザビエル天主堂・天主教女子教育院として、河原町三条上ルに聖地を得た。その女子教育院で目を引く活動をしていたのが、仏人ブロス・メリーであった。

ブロス・メリーは一八四六年(弘化三)生れで、カトリック教会の聖職者として女子教育に力を注いでいた。彼女はフランス手芸塾を開き、洋服の仕立てや着付け、フランス語の個人レッスンまで行って、「神の愛」に根差した教育活動に専念した。

そんな頃、西陣では伊澤信三郎が西陣織を機械化によって進化させることに成功していた。信三郎は近代教育の開拓者と称される伊澤修二を兄にもち、自らは機械の発明に力を尽し、パリの万国博覧会を視察してヨーロッパ各国をめぐる、実業家としての実績を積み上げた。

一九〇二年(明治三五)五月、「私立学校令」のもと、天主教の女子教育機関は実業家伊澤信三郎を設立者として、「私立女子和洋技芸学校」として新たな出発を果

した。学校では、「術科」として裁縫、編物、西洋料理などを、「学科」としては修身、国語、算術など、合計十四科目の授業を行い、八年後には「学則」を改正して、ブロス・メリーを含む外国人四名、日本人四名を教師として、授業内容を充実させていった。

いっぽう、各地の被差別地域でも子女の教育に力を入れていて、上田静一による「田中親友夜学校」も地域の期待を担って発展していた。そのなかで、生徒西山すてが女学校に進学できる学力をつけていたが、学費の出せる家庭環境になかったため、ブロス・メリーが学費を引き受け、私立菊花高等学校に入学することができた。

ブロス・メリーはかつて院長を務めていた「幼きイエズス修道会」以来、孤児・棄児など多数の子女の養育・教育にあたり、第二の聖母マリアと慕われている。彼女は貧富の差、旧弊の差別なく、女性の「自立心」を育てることを目標に教育を行って一生を捧げ、一九二一年(大正一〇)七五歳で永眠した。伊澤信三郎は一九二五年(大正一四)に没し、天主堂で葬儀が行われている。

(運営委員 辻ミチ子)

本の紹介

『子ども』の貧困白書

吉村 智博

昨夏、二つのテレビドラマを観た。ふだんはめつたに観ないのだが、少し訳があつて、不在時間での放映が続いたため、録画までして休日にまとめて観ることになった。一つは、高度経済成長期の一九六〇年代を描いた「官僚たちの夏」(TBS系、一〇回連続)、もう一つは、極端な財政難に陥いた自治体を取り上げた「再生の町」(NHK、五回連続)。前者はいうまでもなく、城山三郎原作の小説をリメイクし、これまでに別のキャラクターでドラマ放映されたことのある作品で、高度経済成長期の通産省(現・経済産業省)内での国内産業育成(=保護貿易)派と、国際競争推進(=輸入自由化)派との対立と葛藤とをモチーフにしている。あつかっている時代がちょうど私自身の幼少期に重なっていたため、大都市近郊のおんぼろアパート(三畳間と四畳半間の二部屋・共同便所・共同洗濯場…)で過ごし、た時期に繰り広げられていた産業

構造の転換と中央省庁の政策の具象を、自身の遠い記憶と重ね合わせて、ある種の感慨をもつて見た。後者は、大阪府内の架空の町が財政破綻し、庁内から選抜されたプロジェクトチームが財政再建策を立案・実行していくというストーリーであった。撮影現場が私の住んでいる町の市庁舎だったことと、この自治体も財政破綻がささやかれて久しいこともあつて将来の不安が頭をよぎつて、こちらはかなりリアリティをもつて受け止めた。

ことわつておかねばならないのは、この二つのドラマを観たのは、何も過去の記憶や未来への関心事を確認するためでも、お気に入りの俳優が出演しているからでもない。いま現在、私たちが直面している「貧困」の問題について、経済成長の「発端」と「結末」を描く両作品からどのようなメッセージが読み取れるかといった、やや斜に構えた視聴者となるためであつ

た。その点からすると、この二つの作品はかなり楽観的な描き方をしているというのが正直な感想だつた。原作が小説の「官僚たちの夏」は、確かに当時のエネルギー生産拠点である石炭や繊維など第二次産業の現場を可能な限り再現し、そこで悪戦苦闘する人々の姿を織り込んでいるが、結局は通産官僚らによる政策の正当性と当時の政府や総理らの決断を「英断」として高く評価しているくらいがあつた。「再生の町」の方といえば、なるほど日常の住民生活にまで切り込んで、公的サービスのぎりぎりの限界を探ろうとする公務員の苦悩を描いてはいるものの、結末はやはり努力を惜しまない「正義感」の持ち主が報われるといった半ば夢物語が示されて終わつていったという感想を抱かざるを得なかつた。煎じ詰めれば、それぞれ「過去の正統」と「未来の楽観」でシナリオが構成されていて、いま目の前で起きている切実な「現状との格闘」をおこなうための具体的なヒントを学ぶにはやや物足りなさを感じたというのが正直なところであつた。

前置きが長くなつてしまつたが、私の手元に、切実な「現状との格闘」を形にして本質的な問題に迫り、社会状況の根本的な変革を迫つた一冊の本がある。タイトルは『子ども』の貧困白書。なんと外連味のない実直な表現であるつか。三五〇頁におよぶ大部なものであるが、手に取つてみて思わず自身に魅せられてしまつた。『白書』と名の付くものは『住宅白書』などの気概のこもつたもの以外はたいてい無味乾燥な数字や統計、素人分析ではないかと思われるような形骸化した表現で埋め尽くされているのが関の山で、ことごとく期待を裏切られてしまつたが、この白書だけは、実に深刻かつ現実感を帯びている内容を盛りだくさん掲載して、子どもを取り巻く現在の社会状況を多角的に照らし出している。以下に、いくつかの項目をとりあげて内容をできるだけ詳しく紹介していきたい。

「Chapter 1 現代日本の子ども」の貧困」では、子どもの貧困状態を考える前提としての定義や視点などが論じられる。「貧困概念」の核になるのは「お金」つまり経済の問題であるとしたうえで、そこから不十分な衣食住、孤立・排除、不安感・不信感、低学力・低学歴などが派生し、貧困の関係性は人生の成長過程で拡大再生産さ

れて、次世代の子どもの貧困を生み出すと説明される。まさに貧困の連鎖である。この連鎖を断ち切り、社会の関係の転換をはかるには、多くの人々の協働と連携が必要であると強調し、各種の問題解決をはかるための「広場」の創出が多種多様な人々によって取り組まれることが重要だと提起される。「貧困をなくす文化」を育む新たな公共圏が作り出される必要性を説いているのである。つづく統計分析からは、やはり親の就労状況などが子どもの貧困と密接に関わっていることが明確になっており、社会政策の失敗もこうした状況に拍車を加え、さらなる貧困率の上昇に繋がっていると指摘される。この点からみても、子どもの貧困は、子ども自身ではどうにも変えようのない問題であることが判明する。また、「特論」のコーナーでは、野宿者問題に長年関わってきた生田武志さんによる、大阪府西成区での貧困の世代間連鎖の問題が取り上げられている。生田さんとは仕事でお会いする事も多く、ふだんから説得力のある議論を拝聴しているが、私自身も簡易宿街「釜ヶ崎」の歴史研究をしている立場にあり、その内容はきわめて示唆に富んでいる。学校教育のな

かで、貧困や野宿の問題を子どもに対して具体的に周囲の人々が教えることがいかに重要であるかは、西成高校などで実践されている反貧困学習からも明らかである。近年の学校教育は、ややもすれば、全国学力テストの成績や校庭の芝生化といった事ばかりに関心が集まっている嫌いがあるけれども、生田さんが指摘しているように、「全国の釜ヶ崎化」は着実に進行していることを見落としてはならない。

「Chapter 2 子どもの暮らし・育ちと貧困」では、乳幼児、小学生、中学生、高校生、定時制高校生、外国籍の子ども、児童養護施設、障害児、特別支援教育など段階別、課題別の具体的な問題が明らかにされていく。小学生ではひとり親家庭（母子・父子）の子どもと親生活が親の収入によって左右されがちであることが具体的な事例をもとに紹介されており、子どものためにセーフティネットを充実させる提案がなされている。とくに夕張市の現状報告は、同市に残って再建を果たそうとし続ける人びとの努力の及ばないところで、教育や福祉が極限まで切りつめられ、この領域にまらずし寄せ

がやってくることを明確に指摘している。苦痛と忍耐の波はまっさきに社会的弱者を襲うのである。冒頭で紹介した「再生の町」はそのことに触れていないわけではなく、現実問題を描き切れていないが、現実問題を描き切れていなかったように思われる。学校給食費や修学旅行の積立金でさえ切りつめて支払わねばならない、ましてや中学校卒業後の進路選択に際して経済事情によって進学先を選択しなければならぬという、個人の努力ではとうてい解決に至らない問題は、高校の教育費の無償化など、現在新政権が検討している政策によって幾分か克服できるであろうか。

「Chapter 3 学費・教育費と奨学金問題」の冒頭には、小学校、中学校、高校のそれぞれの入学年度、つまり一年生段階でかかる費用が見開きのイラスト入りでわかりやすく一覧表にしてある。私自身の将来の子育て計画と重なって思わずため息が出してしまったのだが、ここは気を取り直して、内容の紹介といこう。小学一年生でおよそ一三万三千元、中学一年生ではおよそ二五万六千元、高校一年生にいたっては六四万円強。「ため息」の理由がお分かりいただけ

る数字だと思いが、あくまでも標準的な公立の場合であって、高校から私学に通うとなると、これではおさまらない計算になる。クラブ活動にも費用がかかるわけで、とにかく日本では教育費にかかる親の負担、つまり私費が異常に重すぎる。この問題は『毎日新聞』二〇〇九年九月二六日付でも取り上げられていて、経済協力開発機構（OECD）の公表した「図表で見る教育09年版」にもとづいて解説が付されている。この記事で浮き彫りになったのは公的教育費の支出にあたっての個人負担が著しく高い日本という「先進国」の実状であった。個別データの詳細は記事を読んでいただくとして、教育社会学の先生が給付型奨学金の拡充や財源を確保する議論をする必要があることを指摘して具体的な策として参考になる。

「Chapter 4 テーマで考える子どもの貧困」では、出産、育児、医療など、この世に生まれてから、日本国憲法に謳われている最低限度の生活のために受けることができる権利を担保しているはずの制度そのものの陥穽が具体的に紹介されている。子どもの保険証を取り上げて満足に医療も受けさせな

いなどという非人道的な行為が問題視されたことは記憶に新しいが、そうしたケースは論外だとしても、仕事のために、病気の子どもを無理をして保育園へ預けたり、一人で留守番をさせておかねばならない、というぎりぎりの選択をせざるを得ない場合は、私の子育て経験からしてもたびたびある。多くの親が子どもへの気遣いのいっばうで、収入を得るために「決断」をしなければならぬことは日常茶飯事なのである。短期間のケガや力ぜ程度なら、さほど気を揉むこともないだろうが、こと保険制度そのものに関わるセイフティネットの不備となると、個人の努力や判断ではどうしようもない。自治体毎に異なる高額の国民健康保険料（最高年額はなんと五〇万円！）の未納付による、くだんの保険証取り上げ問題もこうした構造的な背景に原因があることは論をまたない。また、保育の現状も極めて深刻で、基本的に共働きが入園の原則とされているから、ひとり親家庭などで非正規雇用の場合、契約が打ち切られた途端、子どもを預けることが出来ない事態に直面したり、いくら申し込んでも待機児童となってしまう場合もよくある。制度自体が子どもを保護し、親が

働きやすいような環境に整備されていないという結論に達せざるを得ないのである。

「chapter 5 若者の貧困」では、自分の意思である程度行動できる「若者」の生活実態が取り上げられる。最近、大阪府内の府立高校の先生と話をしている、やはり学校現場でも深刻な問題となりつつあるのだと、実感せざるを得ないことが話題にのぼった。高卒者の就職問題である。先生曰く、「昨年までは何とか就職口も確保できて、送り出すことができたが、今年は今況の影響で、地元の企業も求人を極端に減らしている。せっかく落ち着いた運営ができた学年なので、なんとかうまく就職させてあげたいのだが」。返す言葉がなかった。先生たちが毎日ネクタイをしめて放課後に就職支援活動を繰り返しても、働き口そのものが狭き門となっていて、教育現場にはただ不安だけが募っている。内定さえもらえない状況が連日続き、先生も生徒も焦燥感を隠せないでいる。二〇一〇年春の高卒予定者の求人倍率も沖繩の〇・一一を筆頭に軒並み〇・二〇・三ボイント台にとどまっています。「就職氷河期」とさえ称されるに至って

いる（『読売新聞』二〇〇九年九月二日付）。いわゆる地方都市ばかりが目立っていて、都市部はワースト10入りこそしてはいないものの、地盤沈下がささやかれて久しい大阪も当然例外ではないことになる。今後の具体的政策によって、この「就職氷河期」に立ち向かっている生徒や先生の不安は少しでも解消されるのであろうか。

「chapter 6 貧困と地域 沖繩から」「chapter 7 外国に学ぶイギリス」は、国内外の事例を検討したものである。高卒予定者への求人倍率が全国ワースト1である沖繩では、若年層の失業率は慢性化している。ヤマトウとアメリカによる占領と基地問題に翻弄され続けている沖繩は、労働という問題からさえも疎外され続けている。いっばうで、ひとり親家庭の子どもは将来像に不安がついていることだけはヤマトウと同様の悩みを抱えているのである。沖繩ではいま「沖繩子ども白書」づくりが進められている。いっばう、かつてサッチャリズムによる新自由主義の席捲によって失業率が二桁を記録した苦い経験をもっているイギリスでは、貧困問題に早くから取り組んできた。ここでは、民間

福祉団体「子どもの貧困問題解決のための行動グループ（GPAG）」の活動を紹介している。福祉活動の発祥地であるヨーロッパの事例とはいえ、学ぶべき点は少なくないようである。

ここまでは、どの話題をとっても気持ちが悪くむような内容ばかりで、問題の深刻さがいずれの章からも伝わってきたが、「chapter 8 なくそうー子どもの貧困 私たちのとりくみ」では、やや趣きを異にして、各地で積極的におこなわれている具体的な活動が紹介されている。高校生自身を取り組む街頭募金活動によって、大切な友達を奨学金という形で少しでも援助しようという輪が熊本で広がっている。東京・江戸川区では生活保護世帯の子どもが少しでも高校へ進学できる条件を作り出すとする勉強会が開かれている。同じく新宿区でも母子生活支援施設と連携した塾活動によって子どもの「居場所」を創出して、孤立させない取り組みがおこなわれている。「居場所」を喪失している子どもが集団でホームレスを襲撃して殺人まで犯す事態が頻発するなか、貧困と暴力に抵抗する教育実践を模索しつつある「ホームレス問題

の授業づくり全国ネット」の取り組みも広がりつつある。犯罪の加害者 被害者といった「不幸な出会い」をする前に、学校現場で野宿問題をとりあげて現代の貧困と子どもの「居場所」を考える仕組みを作りあげようとしているのである。こうした実践に接すると、「まだまだ、捨てたものじゃないな」といった心強い希望がわいてくるが、そのかたわらで、「本来なら国や自治体は何をおいても取り組む問題じゃないのか？」といった疑念ももちあがる。いったい日本という社会は、子どもに「自己責任」を押しつけて、どのような将来展望をもとうとしているのだろうか。

さて、子どもの貧困と教育という話にもどうだろう。私のような歴史を対象にして研究している場合、どうしても過去の歴史史料のなかに、現在の問題群を照らし出す記録がないものかと、いつも目を皿のようにして探求してしまふ。一種の職業病かも知れない。ともあれ今回もまたそうした史料に行き当たった。記した人物は、かの福澤諭吉である。福澤は、「学制」が制定された一八七二（明治五）年に「小学教育の事」という小編（一

四）を記して次のように述べた。少し長くなるが、最重要箇所を引用したい。

教育の大切なことかくの如し。國中一般に行届きて、誰れも彼れも学者に仕立たきことなれども、今日の事実において決して行われ難し。子供に病身なる者あり、不具なる者あり。家内に病人あり、災難あり。いずれも皆、子供の教育に差支たるべきものなり。されどもこれらは非常別段のこととして、ここにその差支のもつともはなはだしくもつとも広きものあり。すなわち他にあらざる、身代の貧乏これなり。およそに御國中の人口三千四、五百万、戸数五、六百万の内、一年に子供の執行金（授業料）五十円ないし百円を出して差支なき者は、幾万人もあるべからず、一段下りて、本式の学問執行は手に及ばぬことなれども、月に一、二十銭の月謝を出すか、または無月謝なれば、子供の教育を頼むという者、また幾十万あるべし。それより以下の幾百万の貧民は、たとい無月謝にても、あるいはまた学校よりも少々ずつの筆紙墨などを貰うほどのありがたき仕合にて、なおなお子供を手離すべからず。

八歳の男の子には、草を刈らせ牛を逐わせ、六歳の妹には子守の用あり。学校の教育、願わしからざるに非ず。百姓の子が学問して後に身を立身するは、親の心にあくまでも望む所なれども、いかにせん、その子は今日家内の一人にして、これを手離すときはたちまち世帯の差支となりて、親子もるとも飢寒の難渋まぬかれ難し。これを下等の貧民幾百万戸一様の有様といふ。（山住正己編『福沢諭吉教育論集』岩波文庫、五五―五六頁）

障害や病気を一般的な問題ではない（「非常別段」とみているところ、侮蔑的な表現（「下等の貧民」）を用いている箇所は時代状況の限界と考えるとして、貧困こそが子どもの教育機会を阻害する根本原因だとしているところは、まさに一世紀半前の慧眼といえまいか。教育を受けて立身出世するという希望や意思に反して、働けなければたちまち路頭に迷う（「飢寒の難渋」）ことになるという現実。時空を越えて、本書で明らかにされた現実と折り重なる重要な問題が指摘されていると読めてならない。

子どもがセイフティネットによって保護されて伸び伸び成長し、保

護者が安心して教育や福祉に依存できている国（スウェーデンなど）は、負担する税率が少々高くても、将来にわたって展望が拓けているといえる。かつての日本もシビル・ミニマムを基調とした福祉国家としての制度設計がおこなわれ、十分な点がありつつも実態を考慮した政策が打ち出されてきた。しかし今日、曲がりなりにも存在したセイフティネットが新自由主義の席捲でズタズタに切り裂かれ、格差社会があらさまな形で表面化していることは誰しも否定しようがないであろう。あらゆる職種・職域で不安定な就労層がひろがり、日雇労働者層が拡大し、「ワーキング・プア」などという有り難くない呼び名までマスコミに頻繁に登場している。その最たるしわ寄せが子どもに到来していることは、本書が余すところなく明らかにしている。市場優先主義と個人責任追及の波によってセイフティネットが崩壊寸前である今こそ、本書が切り結ぶ、子どもの貧困についての重要な問題群に、ひとり一人が真剣に向きあわねばならないのだと思ふ。

（子どもの貧困白書編集委員会編、明石書店 二〇〇九年九月、二、一八〇〇円＋税）

本の紹介

友永健三・渡辺俊雄編著

『部落史研究からの発信』第3巻 現代編

阿南重幸

(NPO法人長崎人権研究所)

戦後史を捉える論点が試行された。本書は、『部落史研究からの発信』の第3巻として編まれた「現代編」であり、「戦後部落史研究の諸課題」で七本、「戦後の部落問題研究と今後の課題」に八本、「あらゆる差別撤廃に向けた発信」は六本の論文で構成されている。編者の渡辺俊雄は「総論 現代の部落史研究の意義と課題」において、部落解放運動や同和行政に批判が噴出し、あたかも「負の遺産」であるかの雰囲気があると危機感を表し、「」において戦後史研究に共通する問題意識の一つを、戦前あるいは戦時下と峻別せず、その関連・継承性を俎上にのせ、戦後への継承あるいは飛躍・発展について検証すること、また戦後史の時期区分を特措法が失効した二〇〇二年でなく、高度経済成長が終焉する一九七三年ないし七十四年とした。「」

では、部落問題の解決を目指す運動や教育、行政が広く人権擁護の先進的な事例となったとして、今後を考えた現時点での問題意識や課題を提示した。また、「」は隣接する分野や関連する分野での研究から学ぶなどの視点から編集されたとする。

さて、「戦後部落史研究の諸課題」は次のように構成されている。

- 日本国憲法と部落問題（高野眞澄）
- 占領政策と部落解放運動の再出発（渡辺俊雄）
- 部落解放運動の展開とその記録（竹森健二郎）
- 同和行政論（吉村智博）
- 同和教育、解放教育、人権教育（平沢安政）
- 『破戒』をめぐる百年（太田恭治）
- 高度経済成長と部落の生活実態（石元清英）

高野は、日本国憲法制定時ににおける研究を概括した後、解放委員会の関わりを論述し、フランク・アバムの「政府の法的義務も、被差別部落民個人の権利も定めなかつた」ことに、アメリカの公民権法との大きな差異があるとの指摘を紹介し、「福祉国家の理念と人権の原理及び国連のパリ原則の精神を切実に体得して、差別の禁止と人権救済の法制度化を達成すること」を提言している。

渡辺は、戦後史研究の視点として、ダイナミックな地域実態、部落に住む人びとの意識の多様性、革新と保守的な勢力、複合的な視点を持った部落史、の四点を挙げ、解放運動の「突出」は戦後日本社会における行政や教育、労働運動、福祉や人権保障のありようの中に「正當に位置づけられるべきだとしている。

竹森は、戦後の運動史研究で立場を異にする研究を紹介、また占領期研究の深化、佐々木隆爾の「ロストウ路線」をめぐる議論、広島・兵庫・京都等の地方戦後運動史研究を整理し、課題として、戦前と戦後の連続と断絶、特措法以前と以後の運動のあり方を

あげている。

吉村は、同和行政の総合史として、磯村英一編『同和行政論』をまず挙げ、藤野豊、横島章、板寄俊雄、戸木田嘉久、杉之原寿一の研究を紹介した。また同和行政の史的検証をおこなった金井宏司の研究に注目した。以下、地域史の中の同和行政で大阪・京都・兵庫等の研究、オールロマンズ事件の検証、従来の研究を批判的に継承していく視座として、行政施策によつて「部落の共同体がどのように変容したのか」を説明する必要がある、その論点として、融和行政・同和行政の連続性、教育や労働などの同時代性の考察、同和行政の戦後行政全般への位置づけ、を掲げた。

平沢は、部落問題の解決に向けた教育実践を、名称の変遷を表す「同和教育、解放教育、人権教育」として整理し、それぞれその歩みを示した。同和教育においては、アメリカの教育人類学者J・オグブが提唱した「カルチュラルモデル」を克服する教育的働きかけが同和教育の一貫した課題であったとし、戦後同和教育の変遷、九〇年代以降「参加体験型」という新

しい手法が人権総合学習で導入されるまでを示した。解放教育は、名称の同和教育に対するアンチテーゼとして使われたが、次第に他の差別問題の解決に向けた教育内容が含まれるようになった。人権教育は、「人権教育のための国連10年」を期に幅広く取り組まれるようになったが、「部落差別の今」にこだわる同和教育の再構築を呼びかけている。

「『破戒』をめぐる百年」において太田は、関連論文八〇〇を力バーする津田潔編『小説『破戒』・研究文献集成』という基礎研究に導かれたといい、同時代批評、受容と波紋、戦後から現在へ等々細かな「破戒」史研究を鳥瞰した。ただ、太田が指摘するように、『破戒』研究の蓄積のうえに、『破戒』以前・以後の部落問題文芸の研究が望まれるのであれば、次章「」に位置づけられるべきではなからうか。

「」の最後は石元清英「高度経済成長と部落の生活実態」である。石元は、部落の現状研究がなぜ高度経済成長による影響を軽視したのか、と疑問を提示し、根強い「部落＝窮乏説」が背景にある

とする。すなわち、「部落差別＝部落の劣悪な生活実態」という図式による分析が支配的であり、「部落差別が存在しているのは自明であるのだから、部落の生活実態は劣悪なのである」という結論が先のある論考が少なくなかったとする。そして、高度経済成長期における部落の変化が注目されはじめたのは、一九八四年の師岡佑行を待たねばならなかったとする。「戦後の部落問題研究と今後の課題」は、

部落(民)のアイデンティティ
(内田龍史)
部落の民俗伝承(中村水名子)
司法と部落問題(中村清二)
狭山事件(笠松明広)
戸籍制度と部落問題(佐藤文明)
部落実態調査概史(菱山謙一)
メディア社会の人権(西村寿子)
国際的視野からみた部落問題(友永健三)

で構成されている。内田は、部落(民)アイデンティティが活発に問い直されるようになったのは、特別措置法の失効が視野に入る時期であり、それが「揺らいだり、危機的な状況を迎えたときに意識さ

れるもの」であれば、問い直しを必然とする。「期待される部落民像」では、「部落(民)アイデンティティは、時々部落(民)を必要とした社会構造・権力・部落外の人々によって、当事者の側からは部落解放運動によって、それぞれの言説実践のせめぎ合いのなかで構築されてきた」とし、また実証研究が整理されている。研究の方向性として、差別論、エスニシティ論と、部落(民)アイデンティティ研究の接合を展望したいとする。

中村(水名子)は、民俗伝承の掘り起こしを活用すること、新たな文化創造への取り組み、「ムラの歴史」の内容を深めることを提起し、さらに部落内部の差別構造や部落と在日朝鮮人等のかかわりを明らかにすることが望まれるとする。

中村(清二)は、『戦後部落問題関係判例 解説編』『同 資料編』から、結婚差別、興信所結婚差別身元調査、糾弾、の三テーマについて分析概要を紹介している。また、訴訟記録の保管、現行法制度の限界点とその克服課題の整理、他の差別問題との比較研究等を課題としている。

笠松は、「狭山事件」において、運動の歴史、裁判闘争、支援・連帯の広がり論を進め、野間宏が雑誌『世界』に「狭山裁判批判」を連載したことが、この事件を文化人や学者・研究者に広めることに貢献したとする。

佐藤の「戸籍制度と部落問題」は、戸籍の成立と研究史、運動と行政、改革をめぐる論点が整理され、「改革か解体か」「個人籍化」「個人情報保護法」それぞれ具体的な問題を指摘している。

菱山謙一の「部落実態調査概史」は、「」で扱ってもよいのではないだろうか。ここでは戦前・戦後の実態調査の状況が詳述され、国がおこなった最後の調査である一九九三年の「同和地区実態把握等調査」の結果が九六年の「意見具申」に反映されており、物理的改善事業は相当に進展したが、就労の不安定、大学進学率の低さ、結婚問題を中心に偏見や差別意識の解消は不十分であるとする。一般行政としての同和行政が後退する中、今また国による統一的・総合的な調査が望まれるとした。「メディア社会の人権」で西村は、「マイノリティ市民の視座が

らなされたメディア研究を通して再構築されていく『表現の自由』の捉え方、オーディアンス（視聴者・読者）をめぐる研究」について述べるとする。その上で、映像メディアの分析、マイノリティ市民がメディア問題を調整する主体となりうる教育・研究の必要性、差別部落やマイノリティ市民からの発信を促進していく研究、が求められているとした。

友永は、九六年の「意見具申」に「部落問題をはじめとする人権問題の解決」が国際的な責務と指摘されていることに注目し、日本が締結してきた国連の人権関係諸条約との関係で部落問題がどのように取り上げられているのか紹介し、今後の課題を提起するとした。研究課題として、「職業と世系に基づく差別の撤廃に関する宣言」や「条約」の採択をめざした研究を深めるなど、五つの提言をおこなっている。

「あらゆる差別撤廃に向けた発信」では、次の六分野から問題提起が行われている。

在日朝鮮人と在日外国人（高野昭雄）

沖繩（戸邊秀明）

ハンセン病（宮前千雅子）

障害者（勝野有美）

ジェンダー（熊本理抄）

人種主義（竹沢泰子）

高野は、「今後日本が多民族社会へ転換していくためには、日本に来てから一〇〇年の歴史を有するオールドカマーとしての在日コリアンの教訓を生かすべきであり、そうして初めてニューカマーへの対応の道筋も見えてくる」として「通史」「戦間期の在日朝鮮人」から「部落史と在日朝鮮人史」まで詳述される。

戸邊は、沖繩史研究の検討対象を一九九〇年以降に限定し、富山一郎『近代日本社会と「沖繩人」』を画期の象徴とし、課題と展望において、伊波普猷以来の沖繩字の「初心」が喪われる危険を指摘し、これに警鐘を鳴らした屋嘉比収の研究が「初心」をいきいきと更新していく、とする。

宮前は、前近代・近代のハンセン病史、戦後の研究史を詳述し、前後の時代との連続と断絶が曖昧であることを指摘、「近代以降の隔離政策がその家族を含めハンセ

ン病者の人生全体に関わって甚大な被害をもたらしたことを鑑みると、近世から近代への連続と断絶は、なお重要な課題である」とする。

勝野は、社会福祉研究史の概略を、労働・医学・教育と障害の観点で整理し、到達点として、「いまや障害の概念が普遍的なものではなく、経済や社会構造、社会が重視する価値などとの関連においてつくられる」という認識が広く共有されつつある」とし、障害者問題といった切り離して障害そのものを問う視座を提案している。

「ジェンダー」の熊本は、「ジェンダーと部落問題」研究の課題と展望として、部落におけるジェンダー史の解明、部落女性の主体をめぐる研究、部落問題とジェンダーとの重層性・複合性・交差性を解明する理論的研究や実証的研究、部落の文学におけるジェンダー批評、が期待されるとしている。

竹沢は「人種主義」において、その膨大ともいえる研究を理論的研究・黒人・白人・ジェンダー・科学・太平洋戦争・日本・地域等、九つのテーマに分類して概観して

いる。

以上、『部落史研究からの発信 第3巻』（現代編）に収録される諸々の研究史から課題・展望された論点を紹介したが、一読した後のある種の違和感が今も残る。それは、部落史研究という側面からあえて言えば、戦後史研究と現代の区分の曖昧さに因るものかも知れない。戦後史研究と現代は別に論じられるべきではなからうか。渡辺は総論で「日本の社会で部落が占める位置、部落問題が持つ意味が変わったのは同対審答申や同和对策事業特別措置法ではなく、一九六〇年以降に本格的に始まる高度経済成長による日本の社会の構造的な変化による」としているが、必ずしもこの視点は活かされたとはいえない。しかしこうした時期区分が、部落問題の今を照射すると思われるからである。

ともあれ、発信された本書が部落問題の戦後と現代を説き起こす糧となることを祈念する。

（部落解放・人権研究所刊、〇九年七月、三五〇〇円）

「ふつづつの人」のための『近現代部落史』の よみかた・しらべかた（その三終）

杉本 弘幸
（京都市市政史編纂助手）

論文を書く

1 研究発表をする

さて、これではようやく研究史整理や批判ができ、史料調査もできた。このように、「近現代部落史」研究を、通常の手続きで研究を行うのは、論文の検索や史料調査一つにしても、「関係者」以外の「ふつづつの人」にはとても手間がかかり、制約が多いのはご理解いただけたと思う。まずはこのような制約をひとつひとつ無くして、「関係者」だけでなく、誰でも参加可能なオープンな研究分野にしていかなければならないのである。

いよいよ書いた論文を発表しようとするとき、たいいていの人はまず研究発表をして、論文の内容をブラッシュアップしようと考えているだろう。では一つ、学会や研究会で発表をと思っても、「近現代部落史」研究を専門とし、定期的に研究会を開催し、学会誌・研究会誌を出している全国的な学会・研究会は存在しないのである。近年よ

うやく、年に一回各地で大会を行っている全国部落史研究会交流会が、全国部落史研究会に改組し、会員制組織となったが、なぜかいまだ会誌を発行していないのが現状である。

これは、どのような研究分野でも学会や、研究会がある昨今では非常に珍しいことである。例えば同じマイノリティ研究でも、在日朝鮮人史については在日朝鮮人運動史研究会（『在日朝鮮人史研究』）が三年以上前から存在し、韓国には韓日民族問題学会（『韓日民族問題研究』）などがある。また女性史・ジェンダー史については、女性史総合研究会（『女性史学』）、総合女性史研究会（『総合女性史研究』）、ジェンダー史学会（『ジェンダー史学』）が存在している。それ以外の分野においても、かなりマイナーな分野でも、史研究会や史学会がある現状では相当奇異なことだろう。

では、なぜ全国的な学会・研究会が存在しなかったのだろうか？

それは、基本的に「部落史」研究自体が、各地の部落問題関係の研究所や行政、同和・人権教育関係者によって担われ、財政的な裏づけも同和行政・人権行政や教育行政・研究団体などが行ってきたため、それらの機関の紀要などがたくさんあり、発表媒体にこれまで困ることがなかったのである。

むしろ発表媒体の多さに反比例して、研究者が少ないので、同じ研究者が同じ内容の研究論文を、なにも違う雑誌に書くなどということが相当数行われている。ひどい場合は三・四度、ほとんど同様の内容の論文をタイトルを変えて掲載している場合もある。他にも紀要に既に発表した論文を論文集に何の注記もなく、ほぼそのまま転載している事例さえあり、本当に驚きに耐えない。

一方、他のマイノリティ研究は、そのような研究機関はほとんどなく、近年大学などを中心に様々な機関が出来てきたにすぎない。それまでは自主的な学会や研究会を組織して、研究の発表場所を自らの力で作り上げてきた。その研究分野としての力量の差は歴然としている。表三をみてみよう。「近現代部落史」研究について書かれた研究書や論文集がどれだけ学会誌・研究会誌で、書評がされてい

るかを示したものである。実際はこれよりはるかに多くの研究書・論文集が発行されている。あまりにも少ないので、一部に被差別部落に關係する叙述のある著作も組み込んだが、とりあげられたのはわずかこれだけに過ぎないのである。残念ながら、藤野豊『水平運動の社会思想史的研究』（雄山閣出版、一九八九年）のように、研究史上画期的な著作にも関わらず取り上げられていない場合もある。しかし残念ながら、管見の限り、おおむね書評された著作は妥当な評価といえるだろう。また書評者が特定の研究者に集中していることがわかる。学会誌の書評にとりあげられるには、まず書評対象とみなされなければならない。さらに適切な書評者がいなければ、書評対象として見送られる。表3は周囲の歴史学研究者に「近現代部落史」研究自体が、どのようにみられていたかを如実に示すものであり、研究水準の向上と「関係者」以外にも理解できる研究を目指さなければならぬだろう。

私の場合、部落問題研究所と京都部落史研究所（現京都部落問題研究資料センター）で史料調査をさせていただけだったので、これまで、部落問題関係の研究機関では、部落問題研究所、世界人権問題研究

表3 学会誌に書評が掲載された『近現代部落史』関係研究書・論文集一覧(1980-2009)

年代	著者・编者	著書名	出版社	書評誌(執筆)
1980年	ひろたまさき	『文明開化と民衆意識』	青木書店	『歴史学研究』(広瀬玲子)
	布引敏雄	『長州藩部落解放史研究』	三一書房	『日本史研究』(北川健)
1981年				
1982年				
1983年	東義和	『被差別部落と一揆』	明石書店	『法制史研究』(荒井貢次郎)
	天野卓郎	『大正デモクラシーと民衆運動』	雄山閣	『史学研究』(相良英輔)
	工藤英一	『キリスト教と部落問題』	新教出版社	『日本の神学』(熊谷一綱)
1984年	部落問題研究所編	『部落史の研究 近代編』	部落問題研究所	『歴史評論』(塚田孝)、『歴史学研究』(藤野豊)
	森山沾一	『部落解放教育の地域的形成』	明石書店	『教育社会学研究』(今津孝次郎)
1985年	鈴木良	『近代日本部落問題研究序説』	部落問題研究所	『史学雑誌』(小路田泰直)、 『史林』(今西一)
	中川清	『日本の都市下層』	勁草書房	『史学雑誌』(橋本哲哉)、 『社会経済史学』(玉井金五)
	北崎豊二	『近代地方民衆史研究』	法律文化社	『日本史研究』(後藤靖)
1986年	部落解放研究所編	『水平社運動史論』	解放出版社	『日本史研究』(黒川みどり)
1987年	杉原薫・玉井金五編	『大阪・大正・スラム』	新評論	『社会経済史学』(中川清)、 『史学雑誌』(橋本哲哉)
1988年	黒川みどり・徳永高志・ 藤野豊編著	『米騒動と被差別部落』	雄山閣	『歴史評論』(布川弘)、 『歴史学研究』(竹永三男)
1989年	部落問題研究所編	『近代日本の社会史的分析』	部落問題研究所	『歴史評論』(徳永高志)、 『歴史学研究』(藤野豊)、 『日本史研究』(黒川みどり)
	安保則夫	『ミナト神戸 コレラ・ペスト・スラム』	学芸出版社	『日本史研究』(小林文広)
1990年	上杉聰	『明治維新と賤民廃止令』	解放出版社	『法制史研究』(荒井貢次郎)、 『歴史評論』(今西一)、 『日本史研究』(ひろたまさき)
1991年				
1992年				
	玉井金五	『防貧の創造』	啓文社	『大原社会問題研究所雑誌』 (池田信)、『日本労働研究雑誌』 (中川清)、『社会経済史学』 (安保則夫)
1993年	今西一	『近代日本の差別と村落』	雄山閣	『歴史学研究』(上杉聰)、 『史林』(富山一郎)、 『歴史評論』(三沢純)
	布川弘	『神戸における都市「下層社会」の 形成と構造』	兵庫部落問題研究所	『歴史学研究』(中嶋久人)、 『歴史評論』(徳永高志)
1994年				
1995年				
1996年	河明生	『韓人日本移民社会経済史 戦前 編』	明石書店	『経営史学』(韓 載香)、 『コリアン・マイノリティ研究』 (外村大)
1997年	高木博志	『近代天皇制の文化史的研究』	校倉書房	『日本歴史』(阪本是丸)

	藤目ゆき	『性の歴史学』	不二出版	『女性史学』(上野輝将)、『歴史学研究』(宋連玉)、『歴史評論』(石崎昇子、折井美耶子)、『日本史研究』(小野沢あかね)、『家族社会学研究』(大山治彦)
1998年	竹永三男	『近代日本の地域社会と部落問題』	部落問題研究所	『大原社会問題研究所雑誌』(横関至)、『日本史研究』(今西一)、『人民の歴史学』(友常勉)、『歴史学研究』(黒川みどり)
	安川寿之輔編著	『日本近代教育と差別』	明石書店	『教育学研究』(梅田修)、『日本教育史研究』(佐藤広美)
	藤野豊	『日本ファシズムと優生思想』	かもがわ出版	『寄せ場』(金子マーティン)、『SNEジャーナル』(前田博行)、『民衆史研究』(松村寛之)
1999年	黒川みどり	『異化と同化の間 - 被差別部落認識の軌跡 - 』	青木書店	『民衆史研究』(関口寛)
	安岡憲彦	『近代日本の下層社会』	明石書店	『寄せ場』(文貞美)
	辻ミチ子	『転生の都市・京都』	阿吽社	『日本史研究』(北原糸子)、『新しい歴史学のために』(秋元せき)
	松浦勉・渡辺かよ子編	『差別と戦争』	明石書店	『歴史評論』(黒川みどり)
2000年				
2001年	小林丈広	『近代日本の公衆衛生』	雄山閣	『日本史研究』(杉本弘幸)、『人民の歴史学』(阿部安成)、『日本歴史』(中静未知)
	朝治武	『水平社の原像』	解放出版社	『大原社会問題研究所雑誌』(黒川みどり)
2002年	重松正史	『大正デモクラシーの研究』	清文堂	『日本史研究』(能川泰治)、『日本歴史』(松下孝昭)
2003年	小林丈広編著	『都市下層の社会史』	解放出版社	『日本史研究』(布川弘)、『ヒストリア』(杉本弘幸)
	黒川みどり	『地域史の中の部落問題』	解放出版社	『ヒストリア』(布川弘)
2004年				
2005年	横山百合子	『明治維新と近世身分制の解体』	山川出版社	『人民の歴史学』(森下徹)
	鈴木良	『水平社創立の研究』	部落問題研究所	『歴史評論』(今西一)、『ヒストリア』(杉本弘幸)
2006年				
2007年	北崎豊二編著	『明治維新と被差別民』	解放出版社	『日本歴史』(今西一)
2008年	黒川みどり編著	『眼差される者 の近代』	解放出版社	『大原社会問題研究所雑誌』(與那覇潤)
	高木博志	『近代天皇制と古都』	岩波書店	『日本史研究』(布川弘)、『ヒストリア』(戸塚順子)、『明治聖徳記念学会紀要』(藤田大誠)
2009年	?			

基本的に研究書・論文集を対象として、一般書を除いた。また、紀要・学内学会誌は除いた。そして、単なる新刊紹介は対象としなかった。

センター、部落解放・人権研究所で研究発表をさせていただいた。これは全く人づての紹介にすぎず、人脈がなければ、報告機会もなかったろう。

また、これらの研究会はコネやツテのない「ふつうの人」にとつてはいつ・どこで開催されているかすら容易には分からないのである。

そこで、誰もが参加可能なオープンな学会・研究会が必要なのである。既に社会学では「解放社会学会」などもある。そして、女性学などが全く研究分野自体が認知されておらず、何もないところから、学会・研究会を作り上げ、研究発表の場を確保してきた歴史に「部落史」研究者もいまこそ学ぶべきときではないだろうか。「部落史」研究の草創期は「部落史」研究者も自分達の力で発表の場を確保してきたのである。

また、私自身は、歴史学の研究者である以上、様々な歴史学関係の学会・研究会に赴くが、「近現代部落史」研究を行っている研究者をほとんどみかけたことがない。学会や研究会で挨拶や近況報告などの雑談をする「近現代部落史」研究者は決まった数名に過ぎない。他のマイノリティ関係の研究者はたくさん会うのになぜなのだろう

かと、ずっと疑問に思ってきた。そして、私はしばしば「部落史」以外の普通の歴史学の学会や研究会で、「近現代部落史」研究に係る研究報告を行ってきたが、

自分以外で「近現代部落史」関係の研究報告を聞いたのは、十数年で二回しかない。しかもいづれも部落問題研究所歴史研究会と日本史研究会近現代史部会の合同例会である。これでは研究分野として認知されないのも無理ないのではないだろうか。その他、管見の限り、講演的なもの以外のきちんとした実証研究報告を行っているのは、大高俊一郎が東京歴史科学研究会近代史部会、奥本武裕が奈良歴史研究会で報告しているのを知り、前近代の被差別身分に関する研究報告がおこなわれているのをしばしば見るのに比べると大きな格差があるといえるだろう。

私は、普通の歴史学の研究会で発表しつづけることは極めて重要であると考えている。「近現代部落史」研究をやっていない人々にわからない研究をしても意味がないからである。確かに私の経験からいっても、反応は極めて鈍く、薄いが、少しでも研究分野としての水準の向上をはかるためには、「部落史ギルド」の中に逃避せず、

「近現代部落史」研究者一人一人が、普通の歴史学の学会・研究会で発表しつづける地道な努力を続けていく必要があるだろう。

2 論文をどこに書くか

さて、研究発表を行い、課題もみえた。修正して、次はいよいよ論文を投稿してみよう。だが、先に述べたとおり、「近現代部落史」研究を専門領域とする全国的な学会誌・研究会誌は存在しない。では、ふだん「近現代部落史」の研究論文は、どのような場に掲載されているのだろうか。表4をみてみよう。これは、現在刊行されている「部落史」関係の研究雑誌一覧である。当然、洩れもあるだろうが、四以上の雑誌が刊行されていることが確認できる。近年でも『月刊滋賀の部落』、『おおいた部落解放史』、『人権と社会』、『もやい 長崎人権・学』などの雑誌が続々と休刊・廃刊となつていくが、いまだに一つの研究分野としては大量の研究雑誌があることが分かる。これでも近年、部落問題専門から、人権問題全般にシフトして、雑誌や組織の名前の変更をかかなりの機関が行っているにも関わらずである。

このように見てみると、「部落史」研究の世界で学会誌・研究会

誌が一つも、現在にいたるまで存在しない理由が理解できるだろう。いまでも発表媒体が多すぎるくらい存在するのである。しかし、各雑誌の研究機関所蔵数をみてみよう。ほとんどが一以下の所蔵数であり、なんと全く所蔵されていないという雑誌も少なくない。所蔵数を調べてみたところ、日本全国どこでも手に入るのには、『部落問題研究』、『部落解放研究』、『関西大学人権問題研究室紀要』などがあるにすぎない。それ以外の雑誌は部落問題・人権問題関係研究機関にいかなければ閲覧することすらできないマイナー雑誌が大半なのである。

では、このような状況はどのような事態をひきおこすのだろうか？私の場合では言えば、大学院修士課程の間に、年二〜三本の論文の依頼があった。マスターの間にこんなに原稿依頼が来るなど、普通の研究分野ならありえないことである。さすがに私も自分が有能だと思っただけではなかった。この研究分野には、私程度の研究をしている研究者すら少ないのだという至極まっとうな結論に達した。また、私の乏しい研究能力では史料調査をきちんとした確実な実証論文を執筆するのは、年一本が限界である。それ以上書いて、

表4 現在刊行されている主要な部落問題関係研究機関・研究会の紀要・機関誌一覧(2010・1・25現在)

紀要・機関誌名	発行所・発行団体	研究機関所蔵数 (NACSISWebcat)
『解放研究』	東日本部落解放研究所	18
『明日を拓く』	東日本部落解放研究所	29
『水と村の歴史』	信州農村開発史研究所	28
『反差別・人権研究所みえ 研究紀要』	反差別・人権研究所みえ	0
『解放研究しが(リアント紀要)』	反差別国際連帯解放研究所しが	0
『部落問題研究』	部落問題研究所	189
『研究紀要』(世界人権問題研究センター)	世界人権問題研究センター	42
『花園大学人権教育研究』	花園大学人権教育研究センタ	9
『花園大学人権論集』	花園大学人権教育研究センタ (批評社刊)	39
『身同』	真宗大谷派宗務所	10
『研究紀要』(奈良県立同和問題関係史料センター)	奈良県立同和問題関係史料センター	50
『リジョーナル』	奈良県立同和問題関係史料センター	2
『奈良人権・部落解放研究』	奈良人権・部落解放研究所	6
『水平社博物館研究紀要』	水平社博物館	8
『雑学』	下之庄歴史研究会	1
『奈良大学人権教育研究』	奈良大学人権委員会	0
『天理大学人権問題研究室紀要』	天理大学人権問題研究室	7
『奈良教育大学人権教育研究紀要』	奈良教育大学人権・ハラスメント防止委員会	121
『部落解放研究』	部落解放・人権研究所	152
『人権問題研究』	大阪市立大学人権問題研究会	81
『関西大学人権問題研究室紀要』	関西大学人権問題研究室	282
『人権教育思想研究』	関西外国語大学人権教育思想研究所	14
『人権問題研究所紀要』	近畿大学人権問題研究所	3
『大阪人権博物館紀要』	大阪人権博物館	13
『ひょうご部落解放』	ひょうご部落解放・人権研究所	24
『研究紀要』(ひょうご部落解放・人権研究所)	ひょうご部落解放・人権研究所	11
『関西学院大学人権研究』	関西学院大学人権教育研究室	19
『研究紀要』(財団法人兵庫県人権啓発協会)	兵庫県人権啓発協会	14
『人権教育研究』	日本人権教育研究学会	0
『紀要』(和歌山県人権研究所)	和歌山県人権研究所	0
『人権21 調査と研究』	岡山人権問題研究所	14
『部落解放研究』(広島部落解放研究所)	広島部落解放研究所	0
『人権と平和ふくやま』	福山市人権平和資料館	4
『解放研究とっとり』	鳥取県部落解放研究所	1
『しこく部落史』	四国部落史研究協議会	0
『高知の部落史』	高知県部落史研究会	0
『部落史研究報告集』	八幡浜部落史研究会	0
『リベラシオン』	福岡県人権研究所	26
『佐賀部落解放研究所紀要』	佐賀部落解放研究所	16
『部落解放研究くまもと』	熊本県部落解放研究会	5

現在廃刊・休刊した雑誌は記載していない。さらに研究論文が掲載されているもの限定し、ニュースレター・通信・一般広報誌などは除いた。雑誌タイトル変更があった場合、最新のタイトルで検索している。研究機関所蔵数(NACSISWebcat)は2010・1・25現在の所蔵数である。

レベルの低い論文を粗製濫造したくはなかった。大半の雑誌は文章上の修正のみか、書いたものがそのまま載ってしまうのである。こういうこともあって、私は原稿依頼や報告依頼はおことわりしたことはないのだが、部落問題関係の雑誌は、基本的に依頼をお断りした。そうして、現在では、部落問題関係の研究に関しては、論文の質を維持するために研究のフィールドであり、史料調査でお世話になっている京都所在の研究機関に限定して、論文を発表することに決めたのである。

以上のように、雑誌が多すぎる上に書き手が少ないため、同じような研究者が同じような論文や講演録を違う雑誌・論文集に何度も掲載することになってしまっている。講演ならば、詳細はこの参考文献・論文を参照などと書く必要があるだろう。また、研究論文ならば、せめて、一定程度の史料チェックや研究史の確認、論旨の修正など簡単な査読ぐらいは行う必要があるのではないだろうか。そうすれば、現在のようになりにも悲惨な論文が続々と掲載されるという事態に陥ることはないだろう。これではごく一部の真摯に優れた研究を発表し続けている研究者がうかばれない。また、「近

現代部落史」という研究分野としての信用度も、現在よりはるかに上がるのではないだろうか。

私の意見としては、史料調査でお世話になっている史料所蔵機関・研究機関の紀要には、当然優先的に執筆する。ただし、粗製濫造にならないように、書きすぎないこと。それ以外は、ふつうの研究分野と同じようにきちんと全国学会誌や研究会誌に投稿して、査読論文としてブラッシュアップしつつ、歴史学研究全体に研究を問うというのが最も研究の質を保ちながら研究を続けることができるのではないかと考える。

おわりに

さて、ここまでで、これまで多くの一般歴史学研究者の皆さんに質問されたことのある問題についてはほとんど私なりに応じることができたと考えている。これまで述べてきたことをまとめると、

第一に、先行研究を徹底的に調べることである。既に述べたとおり、普通の研究分野の研究の探し方では、重要な論文が非常にマイナーな媒体に掲載されていることが多い。「近現代部落史」研究では正確に研究史把握をすることは不可能である。私もそのため多くの方々に研究論文を提供していただ

いたことがある。また必ず読んでから研究の内容を判断することである。残念ながらごく最近に書かれた研究史整理論文も、多くの偏りがある。当然書き手は中立公正であろうとするが、完全な客観性を担保するのはやはり不可能である。先入観にとらわれず、自分の眼で見ることが大切なのはどの研究分野でも同じだが、「近現代部落史研究」においてはもつとも大切なことなのである。

第二に既存の史料集をよく読みこむことである。確かに一九七八年代に翻刻された「近現代部落史」関係史料集などは驚くほどひどい誤り・脱漏・改竄が多いのだが、原本が復刻版として出されているものも増えてきている。自分が対象としている問題や、フィールドを普遍化するためにも一通り、史料集類を通読することを強く勧めたい。

第三に、被差別部落の史料だけをみれば、「近現代部落史」研究は出来ないということである。史料集をみるのはとても大事だが、論文に引用する場合は必ず原典にあたること。そして、対象とする地域の区有文書・家文書・個人史料や、行政史料、新聞・雑誌を調査しなければ、被差別部落の実態すら捉えられないし、位置づけら

れないだろう。また、史料の整理・公開をさらに推し進めることである。できるだけ「関係者」のみでなく、多くの人々が「近現代部落史」研究に参入しやすい環境をつくるのがいま一番必要とされている。

第四に「部落史ギルド」の中に引きこもらないことである。確かに「部落史ギルド」の中で注文どおりに論文を書いていけば、原稿依頼も来るだろう。「近現代部落史」研究をするのに支障はないかもしれない。だが、それでは確実に通常の歴史学研究とは乖離した「タコソボ」としかいいようのない極めてレベルの低い研究が出来る。いつしか、同じような内容の論文を繰り返し書いてもなるともなくなってくる。それを防ぐためには意識的に、普通の歴史学の学会・研究会で報告し、部落問題・人権問題雑誌以外にも充分掲載される水準の論文を書き続けなければならぬのである。

ごくあたり前のことだが、果たして歴史学会にすら通用しない研究が、一般社会に通用するだろうか？基本的な研究環境の整備や水準の向上こそが「部落史研究」からの発信につながるのである。

以上、みなさんのご指摘、ご批判をお待ちしている。

トラ 中上健次の生涯』(高山文彦著)

部落解放 621号(解放出版社刊,2009.11):630円

特集 人権のまちづくり

本の紹介

『反貧困学習 格差の連鎖を断つために』(大阪府立西成高等学校著) 西成の現実と誇りを土台にしたシティズンシップ教育 森実 / 『日本の癩くらい>対策から何を学ぶか 新たなハンセン病対策に向けて』(成田稔著)

小島伸豊 / 『人間であって人間でなかった ハンセン病と玉城しげ』(堀江節子著) / 『部落差別の謎を解くキヨメとケガレ』(川元祥一著) / 『ケーススタディ 障がいと人権 障がいのある仲間が法廷を熱くした』

(障害と人権全国弁護士ネット著)

部落・差別の歴史 そのとらえ直しと論点 20 第3章 近世における社会的地位 5 地域社会と、被差別部落の集団的性格(続) 藤沢靖介

部落解放 622(解放出版社刊,2009.12):630円

特集 女性の貧困

女の「貧困」を生み出すものはなにか 社納葉子 / プレシングルマザーという存在 離婚前母子家庭の現状と課題 中野冬美 / 介護労働の条件改善を訴える 介護労働に従事する女性の貧困 白崎朝子 / 見えなくされている女性の労働 企業社会のなかの女性差別と貧困問題 屋嘉比ふみ子

本の紹介 中上紀著『熊野物語』 高澤秀次

同和教育の理念をふまえた人権教育を教育の普遍に 全同教から全人教発足へ、その意義 高松秀憲

「怒り」と「感謝」を生む被害の構造 『栗生楽泉園入所者証言集』の編集にかかわって 黒坂愛衣

深刻な人権侵害と搾取からの解放を カンボジアとインドの児童労働 甲斐田万智子

インド仏教の人間解放の精神を伝える 佐々井秀嶺師が日本全国を行脚 山本宗補

部落・差別の歴史 そのとらえ直しと論点 21 第3章 近世における社会的地位 6 領土支配・政治権力、身分(集団)と身分制度 1 藤沢靖介

部落解放研究 187号(部落解放・人権研究所刊,2009.10):1,000円

特集 「大阪の部落史」完結を記念して

考古学による部落史の試み 積山洋/別所秀高/大坂賤民法制の構造と特質 覚書 のびしょうじ/壬申戸籍の編成 大阪府の場合 北崎豊二

就職困難者の貧困と社会的排除 大阪の地域就労支援事業相談者実態調査から見てきたもの 福原宏幸

韓国の識字法 「平生教育法」について 川瀬俊治

企業によるミレニアム開発目標の実現 「国連グローバル・コンパクト」と「ビジネスからの行動要請」 菅原絵美

書評 苅谷剛彦著『検証 地方分権化時代の教育改革 杉並区立「和田中」の学校改革』 諏訪晃一

部落問題研究 190(部落問題研究所刊,2009.9):1,111円

北原泰作文書の調査の経過について 北原泰作文書研究会の活動報告を兼ねて 伊崎文彦,西尾泰広

史料紹介 北原泰作文書(その1)昭和十三年「記録」

本井優太郎

書評 上野輝将著『近江絹糸人権争議の研究 戦後民主主義と社会運動』 戸木田嘉久

「研究の足跡」その1 井ヶ田良治氏の法社会史研究

本願寺史料研究所報 38号(本願寺史料研究所刊,2009.11)

近現代における本願寺寺務簿冊「府下宇治郡山科村大字上花山字旭山火葬場、外一」について(上) 左右田昌幸

水と村の歴史 信州農村開発史研究所紀要 24号(信州農村開発史研究所刊,2009.3)

信州の宿場の被差別部落の成り立ちをめぐって 斎藤洋一

桑山村名主市之丞の日記 文政八年(一八二五)正月~四月 佐藤敬子

これからの人権同和行政の進め方 炭谷茂

人間を尊敬するということ 「部落・三百万人の訴え」から五十年の今 平野一郎

「長野県部落問題関係記事概要」の一部修正と補遺等について 川向秀武

もやい 59号(長崎人権研究所刊,2009.3)

長崎の部落史研究

機関誌総目次/機関誌分類目次/機関誌著者別目次/蔵書目録 長崎県関係

リージョナル 12(奈良県立同和問題関係史料センター刊,2009.9)

特集 史料紹介 大和郡山市池之内町奥西家文書 明治前半期の小学校教育と被差別部落

リベラシオン 135(福岡県人権研究所刊,2009.9):1,000円

特集 外国人研修生問題を考える

「立花町連続差別ハガキ事件」掲載のお詫び 西尾紀臣 部落の若者たちは今 1 四支部合同青年部(津屋・馬出・堅粕・千代第一)座談会 地域を越えてつながり合う青年たちのメッセージ

りべらしおん 37(福岡県人権研究所刊,2009.9)

所長コラム 「自作自演劇」に思うこと 西尾紀臣

ルシファー 12(水平社博物館刊,2009.10):500円

第9回企画展 「『同和』教育の原点を探る 反差別の視点から」を開催して 駒井忠之

第12回特別展 「こんなん知ってた!?はじめての部落問題」を開催して 駒井忠之

講座報告

明治維新と「解放令」 吉村智博 / 「同和」教育の原点を探る 反差別の視点から 寺澤亮一

和歌山研究所通信 34(和歌山人権研究所刊,2009.11)

ピアノパラリンピック運動に学ぶ 「第3期の部落解放運動」の新たな視点 大賀正行

和歌山の部落史編纂事業について 小笠原正仁

- 2009.10) : 500円
 特集 人権教育と教材
 地域と人権 1081号 (全国地域人権運動総連合刊, 2009.10.15) : 150円
 30年前の噂もち出し「糾弾会」
 地域と人権 1082号 (全国地域人権運動総連合刊, 2009.11.15) : 150円
 国民的融合論との対話 部落問題解決への理論的軌跡と展開 丹波正史
 地域と人権 1083号 (全国地域人権運動総連合刊, 2009.12.15) : 150円
 国民的融合論との対話 部落問題解決への理論的軌跡と展開 2 丹波正史
 地域と人権京都 561号 (京都地域人権運動連合会刊, 2009.11.15) : 150円
 記録 総点検委員会報告を『点検』するシンポジウム 1
 地域と人権京都 562号 (京都地域人権運動連合会刊, 2009.12.1) : 150円
 記録 総点検委員会報告を『点検』するシンポジウム 2
 地域と人権京都 563号 (京都地域人権運動連合会刊, 2009.12.15) : 150円
 記録 総点検委員会報告を『点検』するシンポジウム 3
 月刊地域と人権 308 (全国地域人権運動総連合刊, 2009.10) : 350円
 第5回全国研究集会第5分科会
 鳥取県人権条例の諸問題 大田原俊輔 / 差別的表現の問題 中村英樹 / 言論弾圧3事件 小橋太一
 ちくま 463 (筑摩書房刊, 2009.10) : 100円
 青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 29 第7章 『特殊部落一千年史』をめぐって 4 沖浦和光
 ちくま 464 (筑摩書房刊, 2009.11) : 100円
 青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 30 第7章 『特殊部落一千年史』をめぐって 5 沖浦和光
 平野小剣を追う 1 全国水平社創立参加と除名処分 朝治武
 ちくま 465 (筑摩書房刊, 2009.12) : 100円
 青春の光芒 異才・高橋貞樹の生涯 31 第7章 『特殊部落一千年史』をめぐって 6 沖浦和光
 平野小剣を追う 2 福島市の被差別部落から労働運動へ 朝治武
 であい 570 (全国人権教育研究協議会刊, 2009.9) : 150円
 人権のまちをゆく 47 近江八幡の地場産業と解放運動 紳士靴とマンガ
 人権文化を拓く 147 ミュージカルによって「人権」を伝える 大阪・憲法ミュージカル2009のとりくみ 中島宏治
 であい 571 (全国人権教育研究協議会刊, 2009.10) : 150円
 人権文化を拓く 148 貧困率について 湯浅誠
 であい 572 (全国人権教育研究協議会刊, 2009.11) : 150円
 人権のまちをゆく 48 京都東九条地域を歩き、一人芝居を見る
 人権文化を拓く 149 子どもの自己肯定感を取り戻すには 子どもの権利条約誕生20年と日本の子ども 喜多明人
 てくてく キリストと歩こう 150号 (カトリック正義と平和京都協議会刊, 2009.11)
 講演会「児童養護施設の子どもの現状と課題」報告 阿南孝也
 どの子も伸びる 409 (部落問題研究所刊, 2009.11) : 735円
 「人権教育」批判 全同教「同和教育は『教育の普遍である』」について 谷口幸男
 どの子も伸びる 410 (部落問題研究所刊, 2009.12) : 735円
 「人権教育」批判 「教育政策」と「指導のあり方について」にたいする全同教の態度の問題 谷口幸男
 ねっとわーく京都 250 (ねっとわーく京都21刊, 2009.11) : 500円
 同和レポート 泥沼への道をひらいたのはだれか 同和奨学金返済問題前日譚 寺園敦史
 ヒューマンライツ 259 (部落解放・人権研究所刊, 2009.10) : 525円
 先住民族アイヌの権利確立に向けた当事者の訴え 友永健三
 部落問題は、いま 若者からのメッセージ 宮崎懐良、川崎那恵、内田龍史、組坂繁之、川口泰司
 ヒューマンライツ 261 (部落解放・人権研究所刊, 2009.12) : 525円
 書評 中川幾郎『行財政改革と自治体人権政策』 直田春夫
 ひょうご部落解放 134 (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2009.9) : 700円
 特集 受けつがれる部落の文化
 堀池音頭 池田千津美 / 守部観音踊り 三澤雅俊 / 上の島に伝わる文化 1 一夜こら踊り 川面茂樹 / 上の島に伝わる文化 2 差別を笑い飛ばす民衆の力 川面千鶴江上の島に伝わる文化 3 「金三郎」と「チーコイターコイ」 上の島に伝わる守子唄 太田恭治 / 加古川「かつめし」のルーツをたどって 東田寿啓 / 西御着の皮革産業 このごろ思うこと 玉田勝郎 「心田」と悲憤の山脈 追悼 鈴木祥蔵先生
 子どもの生きる力 釜ヶ崎「こどもの里」の活動から 荘保共子
 入管法改定から見える日本社会 リリアン テルミ ハタノ
 低料第三種郵便物の悪用問題 竹本貞雄
 本の紹介
 『冤罪 ある日、私は犯人にされた』(菅谷利和著) / 『部落史研究からの発信 第1巻、第2巻、第3巻』(寺木伸明ほか編著) / 『環境と差別のクリティーク 屠場・「不法占拠」・部落差別』(三浦耕吉郎著) / 『エレクト

- 靴の歴史散歩 94 稲川實
 皮革関連統計資料
 かわとはきもの博物館めぐり 6 クツのオーツカ資料館
 福原一郎
 関西大学人権問題研究室紀要 58号(関西大学人権問題研究室刊, 2009.9)
 大坂町奉行所の刑事判例 2 大坂城代土屋氏御用留による 藤原有和
 自閉症支援における情動共有の意義 串崎真志、田中友梨
 大学教育とジェンダー 2008年関西大学学生の意識調査 関西大学人権問題研究室ジェンダー研究班
 季節よめぐれ 249号(京都解放教育研究会刊, 2009.10)
 部落問題のいま 差別と自分とのかかわりを考えよう 宮前千雅子
 季節よめぐれ 250号(京都解放教育研究会刊, 2009.11)
 ハンセン病問題を考える 差別の連鎖から 藤野豊
 季節よめぐれ 251号(京都解放教育研究会刊, 2009.12)
 公立学校ができること、すべきこと 小林光彦
 京都市政史編さん通信 36号(京都市市政史編さん委員会刊, 2009.11)
 こんどの『京都市政史』は面白い 牧英正
 京都市「同和」奨学金返還請求に反対する会ニュース 3(京都市「同和」奨学金返還請求に反対する会刊, 2009.10)
 いよいよ納入通知書が回っています でも、あわてないで下さい。納期限は年賦を選べば来年の9月です!!
 共生社会研究 4号(大阪市立大学共生社会研究会刊, 2009.3): 1,500円
 特集 共生社会の新しい展開 ジェンダーと移民問題から
 グローブ 59(世界人権問題研究センター刊, 2009.10)
 多くの学生がもつ部落に対するマイナスイメージ 石元清英
 「外国人処遇施策」から「移民政策」へ 李洙任
 人権の“館” 浅川伯教・巧兄弟資料館 朝鮮半島の人と文化を愛した日本人
 藝能史研究 185(藝能史研究会刊, 2009.4): 1,800円
 洛中洛外の富士垢離と富士小屋 村上紀夫
 研究所情報 51(長崎人権研究所刊, 2009.11)
 書評 『被差別民の長崎・学 貿易とキリシタンと被差別部落』(阿南重幸編著) 竹森健二郎
 こべる 200(こべる刊行会刊, 2009.11): 300円
 ひろば 126 父を靖国神社から早く取り戻したい 合祀取消訴訟原告のひとりとして 松岡勲
 播州からの便り 3 ところが縛られるということ 福岡ともみ
 いのちを生きる 25 さあ、再挑戦だ! 長谷川洋子
 映画の現場 写真と文 小林茂
 こべる 201(こべる刊行会刊, 2009.12): 300円
 インタビュー この国で生きて七十二年 東原清子+藤田敬一
 ひろば 127 いのちいっぱい学びたい 夜間中学生の「学びの力」 吉岡千代美
 自分史のこころみ 4 「在日」から見えてくるもの 1 民族との出会い 金光敏
 いのちを生きる 26 職員室に大声が響く
 映画の現場 写真と文 小林茂
 狭山差別裁判 411(部落解放同盟中央本部中央狭山闘争本部刊, 2009.6): 300円
 特集 三者協議と今後の闘い
 野間宏と関巡査部長問題 5 庭山英雄
 試行社通信 276号(八木晃介刊, 2009.10)
 古めかしい理論だ(『対論部落問題』, 『差別と日本人』)
 試行社通信 277号(八木晃介刊, 2009.11)
 これが最後の全研
 人権21 調査と研究 202(おかやま人権研究センター刊, 2009.10): 650円
 特集 平和的生存権
 追悼 長谷川正安先生の思い出 碓井敏正
 人権と部落問題 793(部落問題研究所刊, 2009.10): 630円
 特集 介護をめぐる実態
 追悼 杉之原寿一先生 成澤榮壽
 各地からの通信 京都府・京都市 総点検委員会報告を“点検”するシンポジウムを開催して 小村和義
 文芸の散歩道 (続) 解同路線に立つ 『破戒』論の一典型 川端俊英
 人権と部落問題 794(部落問題研究所刊, 2009.11): 630円
 特集 広がる「九条」を守る運動
 文芸の散歩道 夏目漱石著『三四郎』と戦争 水川隆夫
 人権と部落問題 795(部落問題研究所刊, 2009.12): 630円
 特集 地域と人権
 野中さんよ、部落問題でも前を向こう 『差別と日本人』を見て 成澤榮壽
 文芸の散歩道 隠された秘かなるメッセージ 鶴田知也 『児童・コシヤマイン記』 秦重雄
 季刊人権問題 357(兵庫人権問題研究所刊, 2009.10): 735円
 兵庫人権問題研究所開所35周年記念誌
 杉之原寿一先生を悼む 杉尾敏明
 月刊スティグマ 159号(千葉県人権啓発センター刊, 2009.9): 500円
 特集 第5回千葉県部落問題研究集会 学校で差別事件が起こったら
 明治維新後遺症としての日本人...差別問題をすべての人のものにするための試論 4 日本の伝統思想「循環の思想」 鎌田行平
 月刊スティグマ 160号(千葉県人権啓発センター刊,

- 解放新聞 2449号（解放新聞社刊，2009.12.21）：80円
「差別八ガキ偽造事件」について 最終見解と決意 部落解放同盟福岡県連合会
- 解放新聞大阪版 1797号（解放新聞社大阪支局刊，2009.10.12）：70円
大阪の部落史を歩く 5 抵抗主体の確かな成長 「闘うムラ」高槻春日 のびしょうじ
- 解放新聞大阪版 1800号（解放新聞社大阪支局刊，2009.11.9）：70円
大阪の部落史を歩く 6 「かわ」の経済圏という考え方 河内八尾座村動物性肥料園の成立 のびしょうじ
- 解放新聞大阪版 1802号（解放新聞社大阪支局刊，2009.11.23）：70円
セクハラ・パワハラ根絶へまずは知ることから 府連大会代議員へアンケート調査 1
- 解放新聞大阪版 1803号（解放新聞社大阪支局刊，2009.11.30）：70円
わが身を振り返ってみると... 府連大会でのセクハラアンケート 2
- 大阪の部落史を歩く 7 部落用「檻牢」のこと 岸和田藩東部落の統治 のびしょうじ
- 解放新聞大阪版 1804号（解放新聞社大阪支局刊，2009.12.7）：70円
パワハラ問題の深刻さも 府連大会でのセクハラアンケート3
- 解放新聞改進黨 391号（部落解放同盟改進黨支部刊，2009.10）
40周年記念号 野口副委員長にインタビュー 支部40年の歴史を概観した思いを聞く
- 解放新聞改進黨 392号（部落解放同盟改進黨支部刊，2009.11.20）
民主党マニフェストを読む 1 政権交代で子どもたちは救われるのか 同和教育は再生されるのか
- 解放新聞京都市版 217号（部落解放同盟京都市協議会刊，2009.11）：150円
「崇仁地区将来ビジョン」とコミュニティセンター
- 解放新聞京都市版 218号（部落解放同盟京都市協議会刊，2009.12）：150円
大阪高裁による不当判決に抗議する
久世のまちづくり運動とコミュニティセンターのあり方
- 解放新聞東京版 725号（解放新聞社東京支局刊，2009.10.1）：90円
東京を中心とする部落・差別の歴史 6 江戸時代、被差別部落の仕事・社会的役割 藤沢靖介
- 解放新聞東京版 726号（解放新聞社東京支局刊，2009.10.15）：90円
東京を中心とする部落・差別の歴史 7 被差別部落の仕事 「専業」を中心に 藤沢靖介
- 解放新聞東京版 727号（解放新聞社東京支局刊，2009.11.1）：90円
東京を中心とする部落・差別の歴史 8 「専業」以外にも特徴的な仕事に従事 藤沢靖介
- 解放新聞東京版 728号（解放新聞社東京支局刊，2009.11.15）：90円
東京を中心とする部落・差別の歴史 9 旦那場・勤進場 長吏の専業の仕切り 藤沢靖介
- 解放新聞東京版 730号（解放新聞社東京支局刊，2009.12.15）：90円
東京を中心とする部落・差別の歴史 10 長吏・かわたの社会的位置と身分制度について 藤沢靖介
- 解放新聞広島県版 1968号（解放新聞社広島支局刊，2009.9.25）
解放理論を学び発展させるために 小森龍邦県連顧問に聞く 7
- 解放新聞広島県版 1973号（解放新聞社広島支局刊，2009.11.15）
『朝日新聞』の「新聞倫理綱領」違反と差別の深層心理を問う 小森龍邦
- 解放新聞福岡県版 440号（解放新聞社福岡支局刊，2009.11.30）：50円
「差別八ガキ偽造事件」について 最終見解と決意 部落解放同盟福岡県連合会
- 語る・かたる・トーク 175（横浜国際人権センター刊，2009.9）：500円
わたしと部落とハンセン病 46 始まった識字運動 林力 信州の近世部落の人びと 52 一把稲と旦那場 24 斎藤洋一
- 同和問題再考 105 「聞く耳」持たぬ宗教教団 田村正男 部落差別の現実 86 人権・同和教育の現場 10 江嶋修作
- 語る・かたる・トーク 176（横浜国際人権センター刊，2009.10）：500円
わたしと部落とハンセン病 47 林力 信州の近世部落の人びと 53 一把稲と旦那場 25 旦那場の売り渡し証文 斎藤洋一
- 同和問題再考 106 植木等と父・徹誠さん（上） 田村正男 部落差別の現実 87 知的しょうがい者の人権回復 江嶋修作
- 語る・かたる・トーク 177（横浜国際人権センター刊，2009.11）
わたしと部落とハンセン病 48 林力 信州の近世部落の人びと 54 一把稲と旦那場 26 斎藤洋一
- 同和問題再考 107 植木等と父・徹誠さん（下） 田村正男 部落差別の現実 88 露骨な結婚差別 1 江嶋修作
- カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センターたより 18（カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター刊，2009.10）
対話集会 「部落解放運動の提言」を読む 3 橋本瑠璃子，太田勝，篠原誠，友永健吾，住田一郎
聖歌における見えない差別 4 太田勝
- かわとはきもの 149（東京都立皮革技術センター台東支所刊，2009.9）

収集逐次刊行物目次 (2009年10月～12月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

- アイユ 220 (人権教育啓発推進センター刊, 2009.9) : 200円
 人権とーく 安らかな旅立ちのお手伝い～映画「おくりびと」の納棺師を演じて～ 対談 本木雅弘さん・横田洋三
 明日を拓く 77・78 (東日本部落解放研究所刊, 2009.1) : 2,100円
 特集 近世差別論 身分・境界・思想
 近世身分制の一考察 関口博巨 / 同時代人の描いた夙像 吉田栄治郎 / 民衆宗教運動の再発見 被差別部落史との接続から 渡辺順一 / 禁忌と浄穢 近世後期の国学者の議論を中心に 友常勉 / 資料 石原正明「年々随筆一辛酉上」、伴信友「獣六鹽湯考 附穢多」
 元校長が「龍郷町教育講演会で行った授業実践講演」の経過と課題 石川享助
 <女>について語られてきたこと 4 『ロビンソン・クルーソー』を学び、職業を選択する 井桁碧
 本の紹介 熊谷達也著『箕作り弥平 商伝記』 市川正廣
 跡地発 41 (浅香人権文化センター刊, 2009.9)
 十人十色の人権問題 32 「男女」以外の物語ははいの? 佐倉智美
 解放教育 504 (解放教育研究所編, 2009.11) : 770円
 特集 解放教育の未来を求めて
 解放教育 505 (解放教育研究所編, 2009.12) : 770円
 特集 「国連持続可能な開発のための教育10年」の中間年にあたって
 解放新聞 2437号 (解放新聞社刊, 2009.9.28) : 80円
 今週の1冊 『生物多様性と食・農』 (天笠啓祐著)
 解放新聞 2438号 (解放新聞社刊, 2009.10.5) : 120円
 今週の1冊 『福祉ってなんだ』 (古川孝順著)
 ぶらくを読む 47 新しい通史はどういう世界をみせてくれるか (山本尚友『史料で読む部落史』, 吉田徳夫『部落問題の歴史的展開』, 黒川みどり・藤野豊編『近現代部落史 再編される差別の構造』) 湧水野亮輔
 解放新聞 2439号 (解放新聞社刊, 2009.10.12) : 80円
 山口公博が読む今月の本
 『仏典をよむ』 (末木文美士著) / 『悪の華』 (ボオドレール著) / 『老後も進化する脳』 (リータ・レーヴィ・モンタルチャーニ著)
 今週の1冊 『訊問の罟 足利事件の真実』 (菅谷利和・佐藤博史著)
 解放新聞 2440号 (解放新聞社刊, 2009.10.19) : 80円
 今週の1冊 『消費税をどうするか 再分配と負担の視点から』 (小此木潔著)
 解放新聞 2441号 (解放新聞社刊, 2009.10.26) : 80円
 解放の文学 42 アイヌへの清冽な挽歌 鶴田知也『コシャメイン記』 音谷健郎
 今週の1冊 『ピカソ [ピカソ講義]』 (岡本太郎・宗左近著)
 解放新聞 2442号 (解放新聞社刊, 2009.11.2) : 120円
 ぶらくを読む 48 新しい通史はどういう世界をみせてくれるか (山本尚友『史料で読む部落史』, 吉田徳夫『部落問題の歴史的展開』, 黒川みどり・藤野豊編『近現代部落史 再編される差別の構造』) 湧水野亮輔
 今週の1冊 『マルクスの逆襲』 (三田誠広著)
 解放新聞 2443号 (解放新聞社刊, 2009.11.9) : 90円
 解放の文学 43 「屠畜場」への偏見に挑む 佐川光晴『牛を屠る』 音谷健郎
 今週の1冊 『貧困のない世界を創る』 (ムハマト・ユヌス著)
 解放新聞 2444号 (解放新聞社刊, 2009.11.23) : 80円
 山口公博が読む今月の本
 『校庭の雑草』 (岩瀬徹・川名興・飯島和子著) / 『大阪不案内』 (森まゆみ著・太田順一写真) / 『部落差別の謎を解く キヨメとケガレ』 (川元祥一著)
 解放新聞 2447号 (解放新聞社刊, 2009.12.7) : 120円
 今週の1冊 『「力のある学校」の探究』 (志水宏吉編)
 解放新聞 2448号 (解放新聞社刊, 2009.12.14) : 80円
 解放の文学 44 魔女裁判への危険を解明 鎌田慧と『橋の上の「殺意」』 音谷健郎

事務局よりお知らせ

今年度後半期の部落史連続講座報告を掲載しました。詳しい内容は3月末に発行予定の「2008年度部落史連続講座講演録」をご覧ください。尚、次年度も前期・後期の二期にわけて部落史連続講座の開催を予定しています。次号で詳細をお知らせします。

所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター 3階

TEL/FAX 075-415-1032

URL <http://www.asahi-net.or.jp/~qm8m-ndmt/>

開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 10時～17時 (祝日・年末年始は休みます)

交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅 (京都駅より約10分) 下車 北へ徒歩2分